アイってなんだろう？

キラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アイってなんだろう？

【Ｎコード】
Ｎ４５９４Ｏ

【作者名】
キラ

【あらすじ】
企画「哲学的な彼女」に従って書いてみた作品・第２弾。登場人物は前と変わっていません。今回は、まあ…言葉遊び？

『恋愛とは』

夜、家の自室で買ってきた雑誌を読んでいた私は、その四文字に目を止める。

『フィロソフィー』というこの雑誌には、その名の通り哲学に関する話題が数多く載せられている。月に一度刊行されるこれは、私の愛読書の一つだ。

……哲学雑誌を好んで読むことからもわかるかもしれないが、私という人間は、どうやら普通の人とは少し離れた位置にいるらしい。ささいなことに関しても筋道を立てて、場合によっては数時間、数日間も同じことについて頭を悩ませる。

しかも、その考える内容の多くが哲学的なことであり、そんな性格が影響してか、同年代の女子高生の誰もが行うこと――――おしゃれ、というものだが――――などといったことは一切したことがない。

そういう『変わり者』が、この私。

――閑話休題。話を雑誌の内容に戻そう。今読んでいるのは、読者から送られてくるメッセージの中のひとつ。

『恋愛とは、所詮一時的な気の迷いであることが大半だ。現に、痴情のこじれを原因とする事件が後を絶たない。感情があること、これは人間とその他の動物とをわける重要な特徴だ。…しかし、その中のひとつである恋愛感情とは、果たして本当に必要なものなのか？』

そのメッセージには、大体そんなことが書かれていた。それを読み終えると、私は雑誌を乱暴にベッドの上に放り投げる。

「馬鹿馬鹿しい」

根拠も少ないまま、強引に飛躍的な論理を展開した低レベルな意見だ。

「何が『恋愛とは』だ。自分が経験できないのをひがんでいるようにしか感じられないぞ」

本当に、まったく腹の立つ――

と、ここで私はあることに疑問を持つ。

……なぜ、私はこんなにも怒っている？

いつもの私なら、いかに低レベルな意見であっても2，3回は読み直し、その上でそれらを論破していたはずだ。間違っても、怒りにまかせて雑誌を放り投げたりなどはしない。

だというのに、今回は一度読んだだけで明らかな不快感を感じた。

———つまりそれは、私がこの意見を是が非でも否定したかったということ。

「……ふう」

視線を移すと、『フィロソフィー』と一緒に買ってきた雑誌が床に置かれている。

表紙に書かれていた文字を見るやいなや、思わず衝動買いしてしまったそれは、明らかな女性向けのファッション誌だった。

先ほども述べたとおり、私は学校以外ではいつもジャージ姿でいるような、着飾るということに全くといっていいほど関心がないタイプの人間だ。

そんな私が心奪われた、その雑誌に書かれていた文章とは、以下の通りだ。

『恋する乙女必見！お目当ての男子をメロメロにする秘訣とは！』

――――もう、大体の事情はわかっていただけただろう。

「……どうやら、本当に惚れてしまったらしい」

……私は今、恋をしている。それも、高校で出会ってから、まだ一ヶ月しか経っていないような男に、だ。彼は、私のように哲学が好きなわけではなく、むしろ好奇心などはあまり強くないタイプの人間なのだが…それでも、何だか『いいなあ』と思ってしまったのだ。もちろん、まだ付き合っているわけではなく、仲のいい友達という関係だ。

「…少し前までは、恋愛感情などさっぱり知らなかったこの私が、本質を理解しないうちにそれを抱いてしまうとはな……不思議な話だ」

人間というものの特異性を感じて、私が独り言をつぶやいていた、そんなとき。

Ｐｒｒｒｒｒ

近くに置いてあった携帯から、規則的な電子音が鳴り響く。手に取って、電話をかけてきた相手を確認すると。

「……っ」

うわさをすれば影、ということだろうか。絶妙のタイミングで会話を要求してきたのは、まさしく意中の彼だった。

たわいもない話題だろうと思いつつも、あんなことを考えていた後なため、多少胸の動悸が早まるのを感じながら通話ボタンを押す。

「……もしもし」

「あ、玲菜。ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

「聞きたいこと？」

「そ。“愛”について教えてほしいんだけど」

……は？

今、彼は何と言った？愛？教えてほしい？なにゆえ？いかなる意図があって？？

「……愛、か？」

普段は抑え気味の多少低い声が、おかしいほど上ずっている。だって、いきなりこんな話題、不意打ちにもほどがあるだろう！

「そうそう。どうもよくわかんなくてさ。ほら、抵抗とかあるじゃん」

抵抗？…ひょっとして、学生間の恋愛のことを言っているのか？学生同士がキスするとか、……ま、待て、それ以上は考えるな！

「だからさ、この際概念的なものから教えてもらおうかと。そもそもあれって何なんだ？」

な……概念なんて、私が聞きたいくらいだぞ。

どんどん体が熱くなっていくのを感じながらも、私はなんとか言葉を紡ぐ。

「な、何なのかと聞かれてもだな……大体、何故私に聞くんだ」

普段少々小難しいことを話しているからだろうかと、私は彼の発言の理由を探そうとする。

「え？だってお前、勉強できるだろ？」

「……え？」

彼の言葉に、一瞬思考が停止する。何故ここで勉強の話が……

「この前のテストだって９８点だったし」

――待て。何かがおかしい。

私と彼の間に、何か重大な解釈の相違がある気がする。というより絶対ある。

９８点？確か、現国は９６点、古典は９７点、数学は１００点、科学も１００点、物理は…９８点。これだ。

盛大に混乱している頭をなんとか働かせながら、私は真実にたどり着こうと必死に思考を巡らせる。

愛について聞きたい。抵抗がある。物理ができる。

愛、抵抗、物理。愛、抵抗、物理。

愛、アイ――あれ？

ばらばらのピースが、ぴったりあるべき場所にはまるように、私の頭の中に答えが浮かんでくる。

物理で習うことの中で、『抵抗』という単語が頻繁に登場する分野がある。そしてその中では、『アイ』も重要な概念だ。

つまり。

「……君が言いたいのは、『電気』の話か？」

「？それ以外に何があるんだ？……何だっけ、あの公式。Ｉ＝ＶＲだっけか」

……違う。Ｖ（電圧）＝Ｉ（電流）×Ｒ（抵抗）だ。電気の分野で初めに習う、最も重要な公式・オームの法則だ。

が、重要なのはそこではない。

彼は最初から、電流のＩ（アイ）について話していたのであって。

それを私が愛（あい）の話だと思い込んで、勝手にあたふたあわてていて――

――

ピッ

通話終了ボタンを押さざるを得なかった。

Ｐｒｒｒｒｒ

直後、携帯から電子音が鳴り響く。

ピッ

「なんで急に切るんだ――――」

「頼む私にこのどうしようもない気持ちを整理するだけの時間を少しだけくれっ！！！！」

もう頭から湯気が出るんじゃないかと思うほど真っ赤になっているであろう顔で、私は本気でそう叫んだ。

数分後。

「……すまない。もう大丈夫だ」

「一体どうしたんだ？あんなに取り乱したお前の声、初めて聞いたぞ」

「何でもない……私がただの道化だったということさ」

電話越しでよかったと心から思う。もし直接会話していたら、先ほどの醜態を生で見せることになっていたのだから。

「……難しいな、人間というものは」

「は？」

急に思った事を語り始めた私に対して、携帯の向こうから戸惑った様子の声が聞こえてくる。だが、そんなことは気にせず、私は言葉を続ける。

「人と人は確かに言葉を交わしているのに、それを正しく伝えることができるとは限らない。とんでもない勘違いを起こしてしまうこともある」

それこそ、先ほどの『アイ』のように……ああ、駄目だ。思い出したらまた恥ずかしくなってきた。

「表に出す言葉でさえそうなんだ。まして内面など言うまでもない。つまり、人と人が完全にわかりあうことは不可能だ。なのに――いや、だから、と言うべきか。人は他人に自分の価値観・思いを押しつけようとすることもある。……君は、これについてどう思う？」

私は言葉を切り、彼の返答を待つ。普通の人間なら「知るか馬鹿」とでも言いそうなところだが、彼がこういう質問に真面目に答えてくれることは、私がよく知っている。

「なんつーか、いつものように難しいお題だけど……」

やがて、彼の声が携帯から聞こえてきた。

「別に、なかなかわかりあえないのは絶対悪いことだ、とも言えないんじゃないか？相手に自分の気持ちをわかってもらおうとするのは、それだけその人に価値があるって思ってるからなんだろうし。そのために努力して、そんでもって気持ちが伝わった時は、自分も相手も『少しわかりあえた』ってことでそれをうれしく感じる。そうやって仲良くなっていけるのは、むしろ人間のいいところなのかもしれないぞ？」

その答えを聞いて、思わず笑みがこぼれた。

「そうだな、私も同意見だ」

なぜなら、今彼が自分と同じことを考えていたと知って、私はとても喜んでいるのだから。

「――――で、結局電気については教えてくれるのか？」

私の質問が終わり、彼は本命の話題を持ち出してくる。……確かに、オームの法則すら覚えていないようなら、一から知識を叩きこむ必要があるのは確かだ。

「もちろん構わないが……電話越しでは色々面倒だろうし、時間も遅い。そこで提案だ。明日は日曜だし、私が君の家に行って教えるということでどうだろう」

努めて平静を保とうとして言葉を言いきったが、実のところは相当緊張している。流れでさらりと言ったが、彼の家に行ったことなど一度もないのだ。

私の提案を聞くと、彼は数秒う～んと唸った後、

「ま、母さんはＯＫくれるだろうから……いいぜ。それで決まりだ」

さして深い思惑もなさそうな声で承諾した。その瞬間、心の中でよし、とつぶやく私。

「では一時頃に行くから、用意しておいてくれ」

「わかった。サンキューな」

「ああ。それじゃあ、おやすみ」

「また明日な」

挨拶を交わして、私は通話を切った。

「さて」

立ちあがり、普段まったく使わないクローゼットを開ける。

そこには、海外で働く両親が、たまに帰って来たとき買ってくれる服の数々。いつもジャージを着ているので、これらに袖を通すことはほとんど皆無だ。

「明日は何を着て行こうか……」

想いを伝えようと努力することは、きっといいことだ。

だから、少しは女らしくすることで、私の想いを彼に伝えよう。

……そして、いつかは受け入れてもらえるように。

「それと、このボサボサの髪も何とかしないとな」

その時の私の顔は、おそらく相当にやけていたと思われる。

（後書き）

まあ、Ｉと愛のネタって使い古されているような気もしますが、こんな感じの話に落ち着きました。「哲学的な彼女」という企画にもこの作品を投稿しています。よろしければ、参考になるので評価や感想などいただけるととてもうれしいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4594o/

アイってなんだろう？

2010年10月23日03時57分発行